江戸川

細川流投網漁を30年ぶりに復活「江戸川投網まつり」

江戸時代から伝わる伝統漁法「細川流投網漁」が，江戸川の船宿経営者有志の手で30年ぶりに復活した。5月6日には「江戸川投網まつり」が行われ，屋形船に乗り込んだ見物客は江戸川から葛西臨海公園沖まで約3時間の遊覧と伝統の投網漁を楽しんだ。

細川流投網は江戸末期，参勤交代で江戸にいた熊本・細川藩の藩士から江戸川の下流域に伝えられたといわれている。投網といえば陸から投げるのが一般的だが，それを船上で行うという全国的にも珍しい漁法だ。大正時代から1970年代ごろまでにかけては，投網で獲れた新鮮な魚を船上で刺し身や天ぷらにして振る舞う「網舟」という小舟が，江戸川のほかに隅田川などでも活躍していたが，船の大型化や水質悪化による魚の減少に伴って次第に姿を消してしまった。

全身を使って投網を打つ「細川流投網」

現在の屋形船は「網舟」を元に発達

しかし，伝統的な漁法が失われてしまうことを惜しむ声も多く，二代目の船宿経営者など若手25人が集まって，昨年5月に「江戸投網保存会」（あみ元・関口幸彦代表）を発足。先代から網の打ち方などを教わりながら練習を重ねた。今回の「江戸川投網まつり」は練習の成果を披露する初めての機会ともあって，先代，二代目ともに満を持してこれに臨んだ。

まつり当日はゴールデンウイークの最終日。2人から屋形船が利用できる乗合方式を実施し，料金を半額にするなどのサービスもあって，220人もの乗船客が集まった。家族やグループごとに分かれ，大漁旗のひるがえる屋形船18隻にそれぞれ乗り込んでいざ出航。細川流投網は1枚の網が直径10mから20mにも広がる豪快なものだが，これを各船から一斉に打つ「寄せ打ち」が披露され，川面のあちこちから歓声が上がった。潮の関係もあって，残念ながら大漁というほどではなかったが，網にはウグイやレンギョなどがかかり，中には持ち帰りたいというお客さんもいたとか。

「昔のように漁としての投網は打てませんが，長いこと受け継がれてきた歴史ある漁法ですから，毎年の恒例行事として定着させていきたいですね」とは，江戸投網保存会の1人，あみ貞（てい）の小島貞明さん。今後も定期的に練習会を開き，伝統の技を受け継いでいきたいという。

網に魚がかかるとあちこちから拍手と歓声が

お花見，江戸花火，ハゼ釣り，忘年会，新年会……。四季折々のイベントとともに江戸の情緒と下町風情を味わえる江戸川の屋形船だが，投網漁の復活で，また1つ新たな楽しみ方が加わったようだ。

問い合わせ先

江戸投網保存会
広報担当／小島貞明（こじまさだあき）
Tel　03-3679-3576
Fax　03-3677-4933